

Title	アメリカ合衆国における大学史研究と大学アーカイブズ
Sub Title	Archives and historical studies of higher education in the United States
Author	坂本, 辰朗(Sakamoto, Tatsuro)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2006
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). No.23 (2006. ) ,p.25- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・ 大学史研究と大学アーカイブズ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20060000-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20060000-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アメリカ合衆国における大学史研究と大学アーカイブズ

坂本辰朗

### 一 はじめに

歴史研究者の一人として、アメリカ合衆国における大学アーカイブズを利用し始めてからかれこれ四半世紀が経過するが、この間を振り返るとただちに、「大学アーカイブズにおける不易と流行」とでも名付けるべき特徴をいくつか指摘することができる。埃にまみれ破けそうな古文書を、白手袋をはめた手で恐る恐るめくってゆくという作業を毎年何度も繰り返している筆者にとって、アーカイブズはまさに「(古)文書館」であり、これは最初にアーカイブズを利用したときからいささかも変わってはいない。しかしながら、その文書からの抜き書きのために、かたわらに置いてあるのは、もはや鉛筆と紙ではなくノートPCなのである。これは筆者だけがそうであるというだけでなく、アメリカ合衆国における大学アーカイブズでは、ラップトップ・コンピュー

タを持ち込んでいない閲覧の方が珍しくなりました。筆者がアーカイブズを利用し始めた頃の「流行」は、もはや不易の領域に入り込んでしまったというわけである。否、実際に、デジタル技術は、ノートテイキングの場だけではなく、歴史研究の方法と従来のアーカイブズという概念そのものを一変させてしまった——少なくとも、その可能性をもしや誰人も否定できない——のである。

本稿は、近年のアメリカ合衆国における大学史研究の方法の大きな変貌と、それに呼応するかのような大学アーカイブズの近年の顕著な動向を、一大学史研究者の立場から瞥見しようという試みである。このために、本稿は以下の順序で章立てがなされている。

まず本稿前半では、アメリカ合衆国における大学アーカイブズの成立と発展を簡単に辿ってみる。ただし、なぜ、大学アーカイブズが成立するようになったのかは、アメリカ合衆国大学史そのものの流れを頭に置いておかないとよく理解できないため、これについても最低限の解説を試みる。

次に後半では、ここ二〇年間ほどの期間で起こった、大学アーカイブズをめぐる諸問題のいくつかを取りあげる。特に、二一世紀に入ってからますます勢いで進んでいる、デジタル技術の応用による革命とも呼ぶべき状況について、大学史研究におよぼすその可能性と問題点について言及したい。

## 二一 アメリカ合衆国大学史のダイアグラム

一七世紀の半ばに始まるアメリカ合衆国大学史を略図で表すと、ほぼ、以下のような形に描くことができるであろう。

I 植民地カレッジの時代（一六三六―一七七六年）

一六三六年創立のハーバードをはじめとして、これらの大学は各教会が創った宗派大学であった。ただし、少なくとも一九世紀初めまでは、現在の私たちが考えるような、大学における公―私の区別はきわめて薄弱であり、これらの九私立大学はそれぞれの州の旗艦大学として、州からの全面的な援助を受けていた。

A カレッジ・教会・政府との密接な関係

ハーバード 一六三六年

ウィリアム・アンド・メアリ 一六九三年

イエール 一七〇一年

プリンストン 一七四六年

コロンビア 一七五四年

ペンシルバニア 一七五五年

ブラウン 一七六四年

ラトガーズ 一七六六年

ダートマス 一七六九年

B カリキュラム

C 学生

D 教員

E 大学管理運営

## II 「共和国の教育」の興隆と終焉（一七七六—一八一九年）

アメリカ独立革命の成功とともに、大学はいったんは旧体制の牙城とも見られたものの、やがて共和国建設のための重要な拠点と見なされるようになった。啓蒙主義と科学への浸透は、各大学によって大きく異なった。

### A 「共和国の教育」への志向

B 合衆国立大学の構想とその挫折

C 啓蒙主義と科学

D 最初の州立大学の成立——バージニア大学（一八一九年）

E ダートマス・カレッジ判決（一八一九年）

## III アンテベラム期の大学——新たな知への模索とバックラッシュ（一八二〇—一八六一年）

歴史家ホフスタッターによれば「大いなる後退（*great regression*）」の始まりの時代——宗派間のライバル意識による弱小カレッジが乱立し、第二の宗教的大覚醒の反動としての啓蒙思潮の後退、他方、カレッジの中では学生の組織的暴動が始まった時代——でもあるが、いくつかの注目すべき動向——トランスヴェニア、ポーダンなどのカレッジ、ジョージア、サウス・カロライナなどの州立カレッジの開校。ハーバード、イエール、ブラウンなどの既存のカレッジの強化——も確認できる。

A 旧来のカレッジの増殖と「大いなる後退」

B 学生暴動と「親代わり論」の終焉——ティクナー（ハーバード）、ノット（ユニオン）らの改革への

始動

- C イェール・レポート（一八二八年）
- D 知の構造化
- IV アメリカ的高等教育の興隆（一八六二—一八九〇年）  
旧来の大学のヨーロッパ・モデルを離脱し、アメリカ的高等教育のシステムが確立されてゆく時代。
- A モリル法とランド・グラント・カレッジ (Morrill Act, 1862; Morrill-McComas Act, 1890) と州立大  
学
- B 南北戦争の影響——新世代大学人の登場
- C カリキュラム改革——科目選択制の定着と拡大
- D ドイツ大学モデルの影響——ジョンズ・ホプキンス大学（一八七六年）
- E 女性の高等教育
- F アフリカ系アメリカ人の高等教育
- V 拡大と標準化（一八九一—一九二〇年）  
第一次大戦までのアメリカ高等教育の量的拡大期。
- A 量的発展——多様な学生の登場
- B 短期高等教育——コミュニティ・ジュニア・カレッジの成立と発展
- C いくつものカリキュラム改革

- D アメリカ的高等教育の完成
- E 大学と企業・国家——研究エイトスの変容
- F アカデミック・フリーダムをめぐる問題
- VI ユニバーサル高等教育への移行（一九二二—一九八〇年）  
 高等教育における公正（Equity）と優秀性（Excellence）の双方を実現したシステムとして、アメリカ合衆国が世界の高等教育の中心地（センター・オブ・エクセレンス、COE）としての地位を確立した時代。
- A 戦争と大学
- B リベラル・アーツへの挑戦——「グレートブックス」から「一般教育」まで
- C マス高等教育からユニバーサル高等教育へ——G・I・ビルから高等教育マスタープランへ
- D 大学紛争
- E 学生数の減少とその影響
- VII 多文化主義とインターネットがもたらした知の構造変容（一九八〇年—現在）
  - A 学生消費者主義の浸透
  - B エクセレンス運動
  - C 文化多元主義と多文化主義
  - D インターネットの衝撃——eラーニングからヴァーチャル大学へ

ここでは、このダイアグラムを詳細に解説している紙幅はないが、アメリカ合衆国大学史を大きく俯瞰すると、時代によって以下のようないくつかの大学群を指定できるであろう。

① 植民地時代に成立した九つの私立宗派カレッジ。

② 合衆国成立以降、アンテベラム期（南北戦争以前の時代）に成立した大学。右のダイアグラムでも分かるように、この時期には国立大学の構想が提起されたものの（最初の提案者は初代大統領のワシントン）、これは結局、挫折し、公立大学としての州立大学が——最初の州立大学としてのバージニア大学（一八一九年）、さらにはミシガン大学（一八一七年）→ミシガンが州として合衆国に編入された一八三七年に州立大学に）、ウィスコンシン大学（一八四九年）などが——成立する。さらにこの時代には、多くの旧来型の小規模宗派カレッジが設立されることになる。

③ 一八六二年、連邦議会（ただし、南北戦争中であつたので、南部諸州は除かれている）によって策定されたモリル法に起源をもつ諸大学あるいは同法の援助を受けた大学。モリル法は、連邦所有の国有地を各州に払い下げ、州はそれを基金として大学を設立することができるようにする立法であつた。通常のリベラル・アーツ諸科目に加え、「農業・機械学などの実用的な諸科目」を教えることが、土地払い下げの条件として課されたため、きわめて特色のある「アメリカ的な」大学が誕生することになった。日本でよく知られている多くの州立大学——例えば、カリフォルニア大学、アリゾナ大学、イリノイ大学など——がこのグループに入る。「実用的な諸科目」を教える私立大学も同法による援助を利用できたため、いくつかの有力な私学——例えば、マサチューセッツ工科大学、コーネル大学など——は、その草創期の基盤づくりが可能になった。

④ 南北戦争前後から一九世紀末の間に創設された諸大学。右③の諸大学もそうであつたが、この時代には、



もはやヨーロッパの大学とははっきりと異なる「アメリカ的高等教育」の構成要素となる数多くの大学が設立される。このグループには、

- (a) ハーバードなどの東部諸大学とはいろいろな意味で差別化をはかった「新構想大学」……ポストン(一八六九年)、ジョンズ・ホプキンス(一八七六年)、スタンフォード(一八八三年)、クラーク(一八八七年)、シカゴ(一八九一年)などの私立総合大学。このうち、ジョンズ・ホプキンスは、ドイツ大  
学理念に基づき大学院課程を持ったアメリカ最初の大学院大学として、大学における研究機能の重視を  
打ち出し、後の大学院教育のモデルとなった。

- (b) アフリカ系アメリカ人のための大学……リンカン(一八五四年)、フィスク(一八六五年)、ハワード  
(一八六七年)、モアハウス(一八六七年)、タスキーギ(一八八一年)など。

- (c) 女性のための大学……マウント・ホリヨーク(一八三七年、女子セミナーとして成立↓一八八八年、  
カレッジに昇格)、ヴァッサー(一八六五年)、ウエルズレイ(一八七五年)、スミス(一八七五年)、プ  
リンマー(一八八五年)、バーナード(一八八九年)、ラドクリフ(一八九四年)など。

⑤世紀転換期から二〇世紀初頭、アメリカ合衆国史における最初の高等教育拡張期に成立した諸大学。これ  
らは、それまでに高等教育の機会を奪われていた人々に積極的に大学の門戸を開放するものであった。

- (a) 二年制の短期高等教育であるコミュニティ・ジュニア・カレッジ

- (b) カトリック系の大学

### 三 アメリカ的大学アーカイブズの成立

以上、瞥見したアメリカ合衆国大学史を、個別大学史の編纂とその出版を大学アーカイブズの成立という角度から検討すると、いくつかの興味深い事実が指摘しうる。

#### (1) “祝典大学史”の時代

まず、最古の植民地大学に属する九大学についてみれば、ペンシルバニア、ラトガーズの両大学を除き、一九世紀中に年史を出版している。<sup>(1)</sup>しかしながら、これらの個別大学史は、そのほとんどが、“祝典大学史”(二〇〇大学創立××周年記念祝典)に間に合わせるための“歴史”の性格が濃い。ここで筆者が言う“祝典大学史”とは、当該の大学の存在を正当化するための“歴史”であり、通常の歴史研究と歴史叙述からはまったく切り離され(あるいは、“祝典大学史”の方が、通常の歴史研究と叙述を無視している)、当該大学の関係者を除いては、ほとんど読むに値しない、学問的評価に耐えられない“歴史”のことである。

例えば、ハーバードの創立二百周年を記念して出版された、ハーバード大学史を例にとれば、著者のジョサイア・クインシーは当時のハーバードの学長であったが、彼は基本的に政治家(連邦議会議員)であり、歴史学のトレーニングを受けたわけではなかった。さらにこの二百年史は、これ以前に出版され、ハーバードの創立からアメリカ独立革命までを扱った通史の著者ベンジャミン・パース(一七七八一—一八三二年、同名の息子(二一八〇九—一八八〇年)は数学者・天文学者・ハーバード大学教授。そのまた息子がプラグマティズム哲学

の創始者チャールズ・サンダース・パース<sup>(3)</sup>の業績および彼が収集した史料に大きく依拠していた。そのパースも元々は貿易商であり、後にハーバード・カレッジの図書館員として年史編纂に従事したのであった。クインシーによる二百年史は確かに、「(ハーバード)カレッジのアーカイブズ、州のアーカイブズ、マサチューセッツ歴史協会 (Massachusetts Historical Society) およびアメリカ古書学会 (American Antiquarian Society) 所蔵のマニュスクリプトや書籍を使用」したと述べられている。<sup>(4)</sup>しかしながら、すぐ後に見るように、ここに出てくるハーバード・カレッジ・アーカイブズとは、実際には大学の正式なセクションやプログラムではなかった。また、マサチューセッツ歴史協会はアメリカにおける最古のアーカイブズと言われているが、この時代は未だ、史料の収集や保存という点で組織性と一貫性を有しているわけではなかった。要するに、歴史的研究方法という面でも、史料という面でも、未だ黎明期の時代に書かれたものであったのである。

むろん、ものごとには正規の形態を準備する以前のインフォーマルな時期というものがあるのであり、アメリカの歴史の古い大学の多くが、正規のアーカイブズを持つ以前から、多くは図書館の中に、場合によっては長室に附属する形で、アーカイブズ的なスペースとその仕事を行うスタッフを抱えていた。例えば、ハーバード大学では、一九三八年に大学の正規のアーカイブズ・プログラムを持つに至るが、大学創立からこの時点までに、約一万箱になるハーバードの関係文書と約二万冊になるハーバード大学関係出版物を蓄積していたとされる。<sup>(5)</sup>しかしながら、これらの初期の個別機関の歴史文書蓄積への試みの多くは、「個別大学史の重要性と現在の大部分の大学アーカイブズが果たしている複数のサービスの役割への認識から行われたのではなく、むしろそれらは、好古趣味的・図書館的・系図調べの観点から行われた」と指摘されている。<sup>(6)</sup>

(2) アメリカ歴史学会の成立と大学アーカイブズ

アメリカにおけるアーカイブズ設立への関心は、アメリカ歴史学会 (American Historical Association, AHA) の結成 (一八八四年) の時代に始まるとされる。つまり、アメリカ合衆国において歴史研究、歴史編纂と叙述がアマチュアの仕事からプロフェッショナルの仕事へと転換していった時代に、アーキビストたちも、この学会に参集することになったのである。世紀の替わり目までにAHA所属のアーキビストたちも自分たちの年次大会を開くようになるが、これらのアーキビストたちは、ついに一九三六年に、歴史家の傘の元から離脱して、全米アーキビスト協会 (以下、SAAと略記する) を結成する。ちなみに、ワシントンの国立公文書館の設立は一九三五年であり、アメリカの国立図書館である議会図書館 (Library of Congress) の設立 (一九〇一年) に大幅に遅れてつくられている。この点、アーカイブズが図書館の先駆的な形態であったヨーロッパとはその関係が逆転している。

さらにSAAの一部会として大学アーカイブズ委員会 (現在はSAA大学アーカイブズ・セクション) が置かれたのは、ようやく一九四九年になってのことであった。<sup>(7)</sup>

このSAAの一部会としての大学アーカイブズ委員会の創立メンバーは、以下の大学のアーカイブズ (あるいは歴史コレクション) の代表者であった (カッコ内は大学創立年)。

バージニア大学 (一八一九年)

ペンシルバニア大学 (一七五五年)

オクラホマ大学 (一八九〇年)

ハーバード大学（一六三六年）

ミシガン大学（一八三七年）

フィスク大学（一八六五年）

この顔ぶれは、個別大学史編纂という観点から見ると、きわめて興味深い。バージニア大学は一九二〇年から二二年にかけて、全五巻におよぶバージニア大学百年史を刊行していた。<sup>(8)</sup>同様に、ハーバードでは、一九三六年、歴史学の泰斗であるサミュエル・エリオット・モリソンによる今回は三百年史を刊行していた。<sup>(9)</sup>百年史を刊行し損なったペンシルバニア大学は、その二百年史——大学としての成立以前中等学校の創設年の一七四〇年から起算して二百年——を出版したばかりであった。<sup>(10)</sup>同じくオクラホマ大学はその五十年史の刊行を七年前にすませ、ミシガン大学にいたってはその百年史の刊行はわずか一年前のことであった。<sup>(12)</sup>

これらの大学が創り出した年史は、一九世紀的な「好古趣味的・図書館的・系図調べの観点」からの離脱をめざし、より学問的な検証に耐えうる大学史を志向していたという点では、互いに共通するものをもっていた。すなわち、大学アーカイブズ委員会に集った人々は、個別大学史編纂にとって大学アーカイブズの設立——正確に言えば、それまでの「好古趣味的・図書館的・系図調べの」な文書貯蔵庫ではない、近代的な大学アーカイブズの設立——がどれほど必要なのかを痛切に感じていたわけである。この意味で、大学アーカイブズ委員会の結成は時宜を得たものであったのである。

(3) アメリカ的大学アーカイブズの成立

大学アーカイブズに関する理論および専門職としての大学アーキビスト職は、ようやく一九七〇年代になってから確立されたとされている。この理由はおよそ三つ考えられる。<sup>(13)</sup>

その第一は、上述のように、アメリカにおけるアーキビスト職一般の社会的認知が遅かったからである。SAAを結成したアーキビストたちは多くが州政府・連邦政府のアーカイブズに属する人々であった。これらの人々の近代的なアーカイブズ理論と実践の蓄積は、その後の大学アーカイブズの発展に寄与するところが絶大であった。

第二に、第二次大戦後のアメリカの高等教育が、その質・量ともに、飛躍的な発展を遂げたことである。すなわち、質という面では、アメリカ合衆国は世界の高等教育の中心地としての地位を確立した。量的には、世界最大の高等教育システムを擁するようになったのである。このことは、一方では、急速な発展を経験した個々の大学にとって、変化へのよりよき対応という点で、アーカイブズの一機能を必要とするようになったのと同じ時に、個々の大学および大学の歴史についての情報が、かつてないほど多くの一般の人々にとって、より身近なものに感じられるようになったのである。

第三に、すでにアメリカ合衆国大学史ダイアグラムで瞥見したように、一九世紀中葉から終りにかけての、いわゆるアメリカ的高等教育の時代にその成立を見た多くの大学が創立百年等の節目を迎えるようになったために、その大学史編纂への機運が高まり、アーカイブズが必要となったことが挙げられる。

#### (4) 大学史研究の進展

あいかわらず各地で、『祝典大学史』の出版は続いていたものの、学問としての歴史学の進展とアーカイブ

ズの成立は、それまでにない多くの優れた大学史研究を生み出すことになった。以下に、二〇世紀後半の時代にあらわれた個別大学史研究の業績と、そこから見えてくるいくつかの趨勢について見てゆきたい。

① 一般歴史家の個別大学史への着目

大学史研究、とりわけ、個別大学史の編纂は、その大学の関係者であれば「誰にでもできる」仕事ではもはやなくなったわけであるが、それでは、個別大学史は誰によって書かれるようになったのか。いわゆる大学史の研究者ではない、一般の歴史家が個別大学史に関心を示し、結果として優れた作品を残すという例をいくつか指摘することができる。

例えば、アメリカ思想家・社会史の開拓者であり、多くの優れた歴史家を育てた、ウイスコンシン大学のマー・カーティ (Merle E. Curti, 1897-1996) <sup>(14)</sup> が書いたウイスコンシン大学の通史は、その後の個別大学史編纂の一つのモデルとなる——例えば、キャッスルは、このウイスコンシン大学の通史を「大学史を社会経済的・文化的文脈の中に位置づけることで、個別大学史に新たなスタンダードを設定した」<sup>(15)</sup> と評価する——ものであった。この通史は、第一に、きわめて深く広範囲にわたる史料の特定——当然のことながら、ウイスコンシン大学のみならず、各地のアーカイブズの調査を、著者たちおよび大学院生がおこなっている。ただし、この時代の大学アーカイブズは依然として発展途上にあつた<sup>(16)</sup>——をおこなった上で、たんなる史実の羅列に終わらずに、批判的な分析をおこなっていること、第二に、大学史とそれを取り巻く社会史や政治史をきちんと押さえている——ある意味では、本書はカーティが名著 *Growth of American Thought* (1943) <sup>(17)</sup> で展開したテーマの大学史版とも言える——こと、第三に、学長や教員、行政官だけでなく、例えば学生の課外活動にまで目を配っていること、最後に、何よりも、厳格な歴史的トレーニングを受けたプロフェッショナル歴史家の手による本格的

な歴史書として、安心して読むことができるものであった。

この系統に属する個別大学史として、ストアによるシカゴ大学史<sup>(18)</sup>、ペッカムによるミシガン大学史<sup>(19)</sup>などを挙げるができる。なお、ホーキンスによるジョンズ・ホプキンス大学史<sup>(20)</sup>は、彼自身が同大学の出身者であり、その博士論文として書かれた同大学の創設期の歴史は、アメリカ歴史協会の一九五九年度のタイラー賞を得て出版されることになり、結果として、優れた大学史家を生み出すことになった。これは幸運な一致といえるべきであろう。同書は、今もなお、ジョンズ・ホプキンス大学史を語る上で不可欠の業績である。

### ②学外の歴史家を書いた個別大学史

当該の大学の関係者——卒業生あるいは教員や職員——が個別大学史を書くとしても無批判的な賞賛に終わってしまい、結果として、歴史学の上からはまったく顧みられない「歴史」が生み出される恐れがある場合、しかるべき学外の歴史家に執筆を依頼することも考えられるわけである。この成功例の一つとして、コールによるマウント・ホリヨーク大学史<sup>(21)</sup>を挙げることができよう。コールは、執筆当時はウエスタン・リザーヴ大学教授であり、特に南北戦争時代が専門の優れた社会史家として知られていた。この百年史も社会史の手法を巧みに取り入れており、先のカーティが「合衆国の女性史、教育史、社会史のどのような研究者も無視すべきではない<sup>(22)</sup>」とまで激賞している。

### ③創立者不在の個別大学史

ところで、日本の個別大学史の場合、創立者研究はその重要な要素とならざるをえないわけであるが、アメリカ合衆国の個別大学史を見ると、その大多数が創立者不在の個別大学史——少なくとも、その扱いは重くない——であることに気づかされる。



アメリカ史の基本的な史観や研究スタイル——歴史叙述における Great Man Theory の忌避——もちろん、この傾向に関係していると思われるが、何よりも、アメリカ合衆国大学史においては、ヨーロッパ大学史がそうであったように、「国家が大学を創った」のではなく「大学が国家を創った」——近代国家の成立以前に大学が成立していた——ということ、そしてそこには、Corporation 原理が貫徹していたということが挙げられよう。逆に、創立者研究が個別大学史の大きな部分を占める大学は、いわばアメリカ合衆国大学史のメインストリームからは疎外されてしまった大学——例えば、カトリック系の大学、女性の大学、アフリカ系アメリカ人の大学など——なのである。

もう一つの理由は、アメリカ合衆国大学史にとっては、創立者よりも中興の祖の方が重要であったという事実である。これは、すでに本論文第一節のダイアグラムで見たように、ヨーロッパとは明らかに異なるアメリカ的な大学が成立したのが一九世紀の最後の三〇年から二〇世紀初めの二〇年までということと関係する。ハーバード大学史の中のチャールズ・W・エリオットの位置は、まさにこのような中興の祖とすべきものであった。<sup>(24)</sup>

#### 四 大学史研究とデジタル革命

##### (1) 大学史研究におけるデジタル革命

今から十数年前に、筆者は、アメリカ合衆国の大学アーカイブズについての論考を以下のように締めくくったことがあった。

アメリカではアーキビストが専門職として認知され全国的な職能団体を結成したのであるが、それと同時に、全米的なマニユスクリプト・コレクション・カタログ——議会図書館が作成している *National Union Catalog of Manuscript Collections* や *National Inventory of Documentary Sources in the United States: Part IV—College and University Archives* の作成にいち早く着手したわけである。さらに、個別大学のコレクション・カタログについても主要な大学はほぼ作成されている。これらのカタログはタイムラグという点で難があったが、現在は、より完璧なカタログ作りを迅速に行うことを目的として、全米的なマニユスクリプト・データベースのネットワーク (OCLC と RLIN) が構築されつつある。これらによって、その大学アーカイブズに行く前にどこに何があるのかをかなりの程度正確に知ることができるわけである。大学アーカイブズの普及には、アーカイブズを利用しやすくする条件作りの問題をも見落とすことができないであり、このような動向がさらに加速されることを望みたい。<sup>(25)</sup>

全米的なマニユスクリプト・データベースのネットワークの構築という課題はもはや過去のものとなってしまった。それとともに、冊子体のマニユスクリプト・コレクション・カタログを最後にめくったのも、筆者にとって今や遠い過去の記憶となってしまった。いやそれどころではなく、デジタル革命は、歴史研究の方法そのものを一変させてしまったと言つてよい。以下にこのことを具体的に示してみたい。

#### ① 書誌データベース

まず、歴史研究者はいきなり大学アーカイブズを訪れるのではなく、そこに至るまで多くの予備調査をおこなっているはずである。例えば、ある大学において特定の学問領域の教育と研究が、いつ、どのように導入さ

れていったのかを調べている研究者がいたとすれば、まずは同じ研究テーマの先行研究を確認しなければならぬはずである。この場合、昔懐かしい図書カードや目録をめくっている研究者はもはやいないであろう。これに取って代わったのが書誌データベースである。

アメリカ合衆国の歴史関係データベースの代表は、ABC-CLIO社が作成している *America: History & Life* が代表であろう。一九五五年以来の単行本・学術論文などを収録したこのデータベースは、アメリカ史のあらゆる側面を扱った書誌データベースである。単行本については、かつての冊子体の *Books in Print* もまた、千百万件以上を収録したウェブ・ベースの *Global Books In Print* に取って代わった。こちらの方が当然、一件一件の収録情報はるかに豊富になり——通常の書誌情報以外に、出版社のURLから当該図書の梗概まで収録——検索のインターフェースも使いやすい。

## ② 歴史的人名データベース

人名辞典についても、昔から定番の *Who's Who* もすでにデジタル化された。歴史研究者にとって特に便利なのが、*Marquis Who's Who on the Web* であり、一六〇七年から現在までの現存の人物・物語者を含め千二百万人のデータが収録されている。さらに、アメリカ合衆国の定評ある二つの人名事典——*Dictionary of American Biography* および *National American Biography*——もすでにデジタル化されており、マルチ・フィールド——例えば、生年没年・職業・性別・出身地や出身大学など——をクロス検索できることがこれらのデータベースの最大の強みであろう。

## ③ 全文データベースの登場

書誌情報を確認してから、当該の現物のコピーを入手するというこれまでの方法もまた、今や各種全文デー

データベースの登場によって、大きく変わろうとしている。論文については、EBSCOやProQuest社の Academic Research Library、さらに学術論文のアーカイブズである JSTOR などが代表的な全文データベースである。特に最後の JSTOR は文字どおり「歴史的論文」の宝庫であろう。

特に指摘しておきたいのが、アメリカ合衆国およびカナダで学位授与された博士論文の全文データベースである ProQuest 社の Dissertations & Theses Full Text である。これもまた、かつての冊子体の学位論文抄録誌からの発展の究極とでもいふべきものであり、学位論文そのもののコピーが PDF ファイルで即座にダウンロードできる——同社は、新しい学位論文から徐々にデジタル化しており、現在のところ、PDF ファイルで収録されたものは約六〇万点——のである。

ProQuest 社がかつて同社がマイクロフィルム化した膨大な新聞・ジャーナル・雑誌の情報をもデジタル化してきている。例えば、歴史研究者にとって、過去の新聞にあらわれた情報は、例えばある大学人が当時、どのように評価されていたのかを見る場合に得がたい手がかりをあたえてくれるものであるが、アメリカ合衆国の代表的な新聞——『ニューヨーク・タイムズ』『シカゴ・トリビューン』『ボストン・グループ』『ワシントン・ポスト』など——はほぼすべてデジタル化された。筆者もかつて、冊子体の *New York Times Index* を調べて必要な記事を拾い出し、次にマイクロフィルム版の『ニューヨーク・タイムズ』から当該記事をプリントしていた一人であるが、この作業はもはやまったく時代遅れとなってしまった。なぜならば、デジタル化された新聞は、その全文を対象に、自由に検索をかけられるからである。これが可能なのは、デジタル化された新聞そのものはマイクロフィルムからスキャナで読み込んだ画像なのであるが、検索システムのバックグラウンドではこの画像を対象に OCR (光学式文字認識) 処理をおこなって文字化している——この点が、漢字と違っ

て形が単純なアルファベットの強みで、ほぼ一〇〇%、正確に認識できる——からである。こうして、任意の語句から検索をおこない、即座に当該記事をプリントアウトできるわけである。

なお、新聞記事データベースとしては、もう一つ、Readex社の *America's Historical Newspapers* があり、こちらは、一六九〇年から一九二二年までの期間、アメリカ五〇州で発行された千を超える新聞の全文データベースであり、これは、次に詳しく述べるように、同社のより巨大なアメリカ史の第一次史料を集積した *Archive of Americana* の一部をなしている。

#### ④ 一次史料集成

Readex社の *Archive of Americana* は、一七世紀から一九世紀にかけてアメリカで発行された、現存するすべての書籍・パンフレット・ブロードサイド印刷物 (*Early American Imprints, Series I: Evans, 1639-1800*) および *Early American Imprints, Series II: Shaw-Shoemaker, 1801-1819*)、上述の初期アメリカ新聞集成、さらにアメリカ独立後、一九八〇年までの政府刊行物 (*American State Papers, 1789-1838*) および *U.S. Congressional Serial Set, 1817-1980*) のイメージ・データへのアクセスが可能なデータベースである。あらゆる分野を網羅しており、その巨大さのゆえに最初は使いにくいのが、特に一七一一八世紀のアメリカ史研究は、大学史を含め、これなしには一歩も進めないと言ってしまう。同じく、ProQuest社の *American Periodicals Series Online* は、一七四〇—一九〇〇年の間に発行された一般雑誌中心とした全文データベースで、特に一九世紀の収録が優れている。いずれも、かつては大規模大学図書館の保存書庫の中に所蔵されていた——場合によっては持ち出しや複写に制限が加えられている——一次史料を、細大漏らさず正確に特定し容易に全文を閲覧、ダウンロードできるわけである。

⑤ アーカイブズ情報

そして最後に、アーカイブズ情報の入手という点でも、すでに引用した *National Union Catalog of Manuscript Collections* などの冊子体目録は完全に過去のものになった。RLG (Research Libraries Group) が制作している *ArchiveGrid* は、同グループに加盟している世界の数千の図書館、アーカイブズの100万件にもおよぶインベントリー情報を検索できるシステムである。アメリカ合衆国内に限ると、*ArchivesUSA* が全米五五八一箇所の図書館、アーカイブズが所有する一六万件のコレクションを対象に、より詳細な検索式が設定できると、

(2) 情報格差の拡大

以上のような、大学史研究におけるデジタル革命の恩恵をいちいち書いていけば、恐らく本稿の全紙幅を使っても尽きることがないであろう。しかし、結果として、大学史研究には、大学アーカイブズを訪れてマニユスクリプトを閲覧する前の段階で、研究者によって圧倒的な情報格差ができてしまい、この格差はますます拡大の一途をたどっていると云ってよい。

それはどのようなことであろうか。以上、瞥見した各種デジタル・データベースはすべて有償であり、個人では絶対に購読できないきわめて高額なものだからである。つまり、大学アーカイブズそのものは基本的に完全に *Open to Public* (どのような人にも公開) なのであるが、そこを訪れるまでの基礎調査の段階では、その個人がどのような機関に属するかで、アクセスできる情報に圧倒的な差が——どの機関にも属さず個人で仕事をしている *independent scholar* と呼ばれる人がもっとも不利な立場にあるとして、大学・研究機関所属であっ

でも、その図書館ないし情報センターが、どれだけ多数のデータベースを購読しているかが重要——ついでしまうのである。

すでに筆者がことあるごとに力説しているように、インターネットによって中心—周辺という情報格差が解消するというのは全くの幻想にすぎない。事實は、インターネットによって情報格差はますます拡大の一途をたどっていると言つてよいのである。

なるほど確かに、大学やアーカイブズが、その所蔵する図書やマニスクリプトなどをネット上に無償公開するという趨勢もないことはない。しかしながら、ここでもまた、別の種類の格差が生じてしまつてゐる。すなわち、肝心のアーカイブズの側が、このようなデジタル技術を巧みに応用できるところとそうでないところの二極化を起こしているという事實である。ある論者は、アメリカ合衆国におけるアーカイブズ教育の今日的課題を論じた中で、「今日、アーカイブズという仕事場は、真の意味での、すばらしい新世界なのである。アーキビストやマニスクリプト・キュレーターは、WWWが流行中で、EAD (Encoded Archival Description 符号化記録史料記述) はほとんど概念化されておらず、デジタル・アセット管理システムなどは創られていなくつた、ほんの一〇年前、誰が予想したであろうテクノロジーの挑戦に直面してゐるのである」と指摘しているが、従来の感覚から言えばデジタル・テクノロジーからはもつとも遠いところにいると思われそのアーカイブズこそがデジタル革命の最先端であるという逆説を引き受けられるところとそうでないところに、はつきりと分かれてしまつてゐるわけである。

## 五 特別コレクションと大学アーカイブズ

アーカイブズはアメリカ合衆国の高等教育界のなかではもはやすっかり根付いた存在であり、コミュニティ・カレッジ（二年制の地域社会短期大学）ですら、アーカイブズを持つている大学も決してめずらしくはない。<sup>(27)</sup>しかしながら、アーカイブズだけが独立して存在することはやはり難しいようで、これは、アメリカ合衆国高等教育につねに存在する「市場原理」——つねにより多くの「顧客」が来てくれないと、大学内でその存続が危うくなること——から言えば当然かもしれない。この結果、大学アーカイブズは、組織的には、他の特別コレクションと一緒に——というよりもむしろその一部として——存在しているところが多くなる。ボストン大学の例がこの間の事情をよく物語ってくれよう。

ボストン大学の開学は、慶應義塾とほぼ同じく一八六九年である。<sup>(28)</sup>同大学はもともと、一八三九年にバーモントに設立されたメソヂイスト神学校に端を発する。同神学校は、一八四七年、ニュー・ハンプシャーに移った後、一八六七年、ボストンへと再度移転、ボストン神学セミナーとなった。これがボストン大学の最初のスクールを構成することになる。一八六九年に大学の設立認可状を取得し、以降、数年で大学としての陣容を整えてゆくことになる。アメリカ合衆国史上、最初に、女性に対して学士課程・大学院の全課程を開放した共学制の大学であり、また早くから、アフリカ研究にも着手した大学でもあり、日本からの留学生も多く学んでいる（日本人最初の卒業生は、後の中央大学の創立メンバーの一人であり学長も務めた菊池武夫であった）。ボストン大学のアーカイブズは、一九六三年、同大学に特別コレクション部門が設立されたことにともなっ



て、その一部として発足している。ただし、本論第三節ですで見たとように、実際には、一九世紀中葉以来蓄積された大学文書は、正規のアーカイブズを持つ以前から、学内の別の部署に置かれ、そのためのスタッフを抱えていた。

特別コレクションの初代のキュレーターはハワード・ゴットリーブ（一九二九—二〇〇五年）であり、以降、ボストン大学はひとえに彼の手腕によって、その膨大な二〇世紀アメリカ・コレクションを創り上げたといつてよからう。

この大学の特別コレクションの中でもっとも著名で多く利用されているのが、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア（一九二九—一九六八年）文書であろう。キング牧師はボストン大学の卒業生（一九五五年、同大学で博士号を取得）であり、同大学としては、この著名なアフリカ系アメリカ人指導者の文書を所蔵することには、当然、強い関心を払ったわけである。ゴットリーブはキング牧師の存命中の一九六四年に、この公民権運動の指導者に接触し、その九万三千点にもおよぶその所蔵文書を母校に寄贈する約束を取り付けたのである。<sup>(29)</sup>

このようにして集められた二千人以上の二〇世紀著名人コレクションの中には、アイザック・アシモフ（一九二〇—一九九二年）のようにボストン大学と直接関係を持った人々——アシモフはSF小説家として著名であるが、生化学者としてボストン大学の医学部教授でもあった——もいるが、著名なジャーナリストのデイヴィッド・ハルバースタム（一九三四年—）のように同大学とは無関係な人々の方がむしろ多い。

この他、同特別コレクションには、コーベルガーなどのインキュナビュラを含む一四万点にもおよぶ稀覯本も所蔵されており、ゴットリーブが一代で創り上げたコレクションと言ってよからう。このため、ボストン大学では彼の功績に報いるために、二〇〇三年、それまでの特別コレクションをハワード・ゴットリーブ・アー

キバル・リサーチ・センターとして組織改革をおこなっている。

では、筆者の関心の対象である大学アーカイブズの方はどうであるかと言えば、母体の組織が拡充改革されたわりには、それほど改善されたとは言い難い状況である。筆者は一九八九年からボストン大学のアーカイブズを利用しているが、最初に訪れたときは、図書館の最上階にあるこのアーカイブズは、閲覧室（というよりも、部屋の一区画をガラス・ドアで間仕切りしたスペース）は一〇席もなく、きわめて小規模であった。それが、数十人は仕事ができると思われる、ゆったりとした閲覧室を持つようになったのであるから、ある種の発展は認められようが、コレクションの整理・分類という面では、やや手抜き状態——初代学長のペーパーですら完全に整理されていない——であるという印象を受けた。これは、現在のボストン大学史関係の専任は一人のみであるということのしわ寄せであろう。

筆者は、アメリカ合衆国大学史の中でも特に、ジェンダーと高等教育というテーマに興味を持っているが、通常の大学アーカイブズを訪れた際には、史料の探索に苦勞することも多く、ましてや、先述のように、大学アーカイブズが大きな部局の小さな一セクションということになると、結局のところ、大学史研究は、華々しい分野ではありえないということを実感させられることが多い。しかしながら、大学アーカイブズがより大きな研究組織の一部になること自体は、一大学内における組織的な戦略という側面は別にしても、積極的な意味があると筆者は考えている。すでに述べた、個別大学史の「祝典大学史」化傾向への歯止めはどのようにすれば可能か、という論点を考察してゆくと、それは、大学史が、より大きな歴史的文脈の中で検討される機会が増えるということが大きな力になりうるのではないかということである。ボストン大学のあるいは慶應の福祉研究センターがまさにそうなのであるが、当該大学の歴史を専門としない人々——当該大学の関係者でもなけ

れば、高等教育史の専門家でもない人々——との接点があるということとは、つねにおのれの位置をより広い歴史的文脈の中に見出すという思考法をとりとらざるをえないからである。

注

(一) 一九世紀中に刊行されたこれら九大学の個別大学史を以下に掲げる。これらの史料の価値は未だに否定できないが——原史料の所在を特定しているだけでなく、これらの年史が刊行された後で、さまざまに事情で、年史執筆に使用された原史料が失われてしまった場合もある——本文でも一部を指摘するように、通史編纂の方法や史観といった点では多くの問題を抱えている。

Josiah Quincy. *The History of Harvard University*. (Cambridge: J. Owen, 1840).

College of William and Mary. *The History of the College of William and Mary, From Its Foundation, 1693, to 1870*. (Baltimore, Printed By J. Murphy & Co., 1870).

Ebenezer Baldwin. *History of Yale College, From Its Foundation, A.D. 1700, to the Year 1838*. (New Haven, B. and W. Noyes, 1841).

George Riddle Wallace. *Princeton Sketches: The Story of Nassau Hall*. (New York: G. P. Putnam's Sons, 1893).

Nathaniel Fish Moore. *An Historical Sketch of Columbia College in the City New-York*. (New-York, Columbia College, 1846).

Reuben Aldridge Guild. *History of Brown University: With Illustrative Documents*. (Providence, R.I.: Providence Press Company, 1867).

Baxter Perry Smith. *The History of Dartmouth College*. (Boston, Houghton, Osgood And Company, 1878).

- (2) Josiah Quincy. *The History of Harvard University*. Cambridge: J. Owen, 1840.
- (3) Benjamin Peirce. *A History of Harvard University: From Its Foundation, In The Year 1636, To the Period of the American Revolution*. (Cambridge: Brown, Shattuck, And Company, 1833).
- (4) Quincy. *The History of Harvard University*, p.x.
- (5) Robert W. Lovett. "Clarence E. Walton and the Harvard University Archives," *Harvard Librarian*, Vol.15 No.4, (December 1981), p.6.
- (6) William J. Maher. *The Management of College and University Archives*. (Chicago: SAA & New Jersey: Scarecrow Press, 1992), p.7.
- (7) Nicholas C Burekel and J. Frank Cook. "A Profile of College and University Archives in the United States." *American Archivist*, Vol.45 No.4, Fall 1982, pp.410-411.
- (8) Philip Alexander Bruce. *History of the University of Virginia, 1819-1919; The Lengthened Shadow of One Man*. (New York, The Macmillan company 1920-1922), 5 vols.
- (9) Samuel Eliot Morison. *Three Centuries of Harvard, 1636-1936*. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1936).
- (10) Edward Potts Cheyney. *History of the University of Pennsylvania, 1740-1940* (Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1940).
- (11) Roy Gittinger. *The University of Oklahoma, 1892-1942*. (Norman, University of Oklahoma Press, 1942).
- (12) Kent Sagendorph. *Michigan, the Story of the University*. (New York, E. P. Dutton, 1948).
- (13) Maher. *The Management of College and University Archives*, pp.7-8.; Annabel Straus. "College and University Archives: Three Decades of Development," *College and University Archives*, Vol.40 No.5, (September 1979), pp.432-439.
- (14) Merle Curti and Vernon Carstensen. *The University of Wisconsin: A history*. (Madison: University of Wisconsin Press,

1949), 2 Vols.

- (15) Alfred L. Castle. "Merle Eugene Curti." *The Scribner Encyclopedia of American Lives*, Vol. 4, 1994-1996. (Charles Scribner's Sons, 2001).
- (16) この問題は、このカーティらの個別大学史の書評をしたバックが指摘している。「遺憾ながら、この史料の大部分、とりわけ大学関係記録は、これまで整理がなされていなかったと見受けられ、大きな空隙がいくつもある。ウイスコンシン歴史協会が収集し保存し整理してきたマニエスクリプトその他の文章は貴重であるが、もしも『大学アーカイブズ』がもっと前に設立されていたら、より優れた歴史が描けたであろうに」。Solon J. Buck. "Review: The University of Wisconsin: A History, 1848-1925 by Merle Curti, Vernon Carlsensen." *The American Historical Review*, Vol. 55, No. 4 (Jul., 1950), pp. 938-939.
- (17) Merle E. Curti. *The Growth of American Thought*. (New York, London, Harper & Brothers, 1943). 龍口直太郎・鶴見和子・鶴飼信成共訳、『アメリカ社会文化史』全三巻(東京：法政大学出版局、一九五四年)。
- (18) Richard J. Storr. *Harper's University: The Beginnings: A History of the University of Chicago*. (Chicago, University of Chicago Press, 1966).
- (19) Howard H. Peckham. *The Making of the University of Michigan, 1817-1967*. (Ann Arbor, MI.: University of Michigan, 1967). なお同書は、一九九四年、大学創立一七五周年記念増補版として再刊されている。
- (20) Hugh Hawkins. *Pioneer: A History of the Johns Hopkins University, 1874-1899*. (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1960).
- (21) Arthur C. Cole. *A Hundred Years of Mount Holyoke College: The Evolution of an Educational Ideal*. (Yale University Press, 1940).
- (22) Hans L. Trefousse, "Arthur Charles Cole," *Dictionary of American Biography*, Supplement 10, 1995).

- (23) もちろん例外はいくつもあり、例えば、バージニア大学を「創立した」——バージニア大学は州立大学であるから、創立の功績を個人に帰すのはやや無理なのであるが——ジェファソンについての研究はこの代表であろう。新たな「創立者」ジェファソン」研究については、Alf Johnson Mapp, *Thomas Jefferson: Passionate Pilgrim: the Presidency, the Founding of the University, and the Private Battle*. (Madison Books, 1991). が挙げられる。
- (24) この系譜に属する研究は文字どおり膨大にあるが、新たなモノグラフとして、Elizabeth Melia, "Science, Values and Education: The Search for Cultural Unity at Harvard under Charles W. Eliot, A. Lawrence Lowell and James B. Conant." Unpublished PhD Thesis, Johns Hopkins University 1995. があつ。
- (25) 拙稿、「アメリカの大学アーカイブズ」寺崎昌男・別府昭郎・中野実（編著）、「大学史をつくる」（東信堂、一九九九年）、三七四頁。ただし、本原稿の執筆は一九九三年である。また、引用文の表現を若干、改めた。
- (26) Helen R. Tribbo, "So Much To Learn, So Little Time To Learn It: North American Archival Education Programs In The Information Age And The Role For Certificate Programs," *Archival Science*. DOI 10.1007/s10502-006-9031-5.
- (27) アメリカ合衆国の短期大学における大学アーカイブズの諸問題については、Adele Louise Odelenberg, "The Role, Scope, and Nature of Archives in Two-Year Institutions of Higher Education in the Southern United States." Ph.D. Dissertation, Florida State University, 1987. を参照。
- (28) ホストン大学の通史は、Warren O. Ault, *Boston University The College of Liberal Arts 1873-1973*, (Boston: Boston University, 1973). および、Kathleen Kilgore, *Transformations: A History of Boston University* (Boston: Boston University Press, 1991). が出されている。オウルトの著作は題名から推察できるように、ホストン大学の教養学部創立百周年を記念してホストン大学より発刊されたものであるが、このカレッジ正史ともいいうべき業績は、遺憾ながら、誤記や不正確な記述、杜撰な引用文献の挙げ方（彼が引用文の典故として挙げている文献には該当の引用文が存在しないなど）が散見する。後者のキルゴアの著作はホストン大学創立一五〇周年記念——一八三九年のメソヂイスト神

学校の成立時から数えると一九八九年が一五〇年目になる——の大学全体の通史である。こちらは史料をよく消化した上にコンパクトにまとめられている。ただし、現在の個別大学史編纂のレベルから言えば「祝典大学史」の性格が濃いのが残念である。

- (29) "Howard Gotlieb, 79, BU Curator of Archives for 42 Years," *Boston Globe*, (December 3, 2005), p.413. ちなみに、キング牧師が暗殺された後、遺族からこの文書を返還しようとしたが、一九九三年、ボストン大学が勝訴した。